
勇者御一行の拾いもの

シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者御一行の拾いもの

【Nコード】

N7108Y

【作者名】

シキ

【あらすじ】

今日も今日とて魔物を退治する勇者ご一行。彼らが拾ったものは チキン野郎？

きつと最後まで書けないだろう。でも書き始めてしまった。無責任執筆はじめました。

1、勇者御一行

ここは、一番近くの町から歩いて1日ほどかかる森の中。

今日も今日とて勇者一行は魔物を退治していた。

森の中は、木々の隙間から太陽の光が降り注ぎ不気味な雰囲気はないものの、辺りには血の臭いが満ちている。

「うぜーんだよっ」

集団で襲ってきた犬型の魔物を、そうやって大剣で切り伏せた青年は鬼の形相をしていた。

最後の一匹を仕留めると、彼は大剣についた血を振り払い大剣を背中に背負う。

その青年こそ、聖武器の1つである聖なる大剣リュシリオンに選ばれた勇者エイゲルであった。

サラサラの金髪を掻き上げたエイゲルは、軽く息を吐き、仲間に向かって笑顔を向けた。

「これで今日も人々の脅威を減らせたね」

金髪碧眼で爽やかな笑顔のエイゲルは、まるでお伽噺の王子様のようである。

魔物にむけていた醜悪に歪んだ表情など想像もできない。

そんな爽やかに微笑む勇者の言葉にすぐ答えたのは、お調子者のエリオット。

黒い髪を一本の三つ編みにして背中に流した青年だ。

浅黒い肌の顔には常に軽薄な笑みが張りついている。

「おいおい、またエイゲルがクツサイこと言ってるぜ」

ニヤニヤしたエリオットに勇者エイゲルは気にした風もなく爽やかに言い切った。

「きつと、これのせいでは？酷い臭いですから」

そして先程とどめを刺した魔物の頭をブーツで踏み潰す。

グチャツという音と共に、魔物の頭が潰れた。

エイゲルが履いている茶色のブーツに魔物の赤い血がついたが、エイゲルは気にした様子もなくニコニコと笑い続けている。

勇者の仲間の1人である司祭服を身につけた青年が、それを見て眉を寄せた。

「おい、エイゲル。魔物といえど死者を愚弄するような真似はやめろ。」

真っ白い司祭服に、白い髪、そして右目を白い眼帯で覆った青年は不自然なほど神秘的で中性的であった。

だが中性的な容姿とは反対に口調は荒い。

「てめえは、いつもいつも魔物といえは酷い扱いしやがって。だいたい、もう死んでんだよ。それ以上、傷つける必要ねーだろうが。」

司祭服の男が、勇者エイゲルを睨み付ける。

エイゲルはニコニコと笑って答えた。

「ライトさんは、何を言ってるんですか？もう死んでるなら何をしたらいいでしょう？どうせ死んでることに変わらない。」

それに、と続けようとしたエイゲルに艶っぽい声が重なる。

「そんなことより早く町に帰りましょうよ。魔力を使ったから甘いものが食べたいの」

エイゲル、エリオット、司祭服の男が一同に声の方を向いた。

そこには肉感的な女性が、立っていた。

胸元が大きく開いた、青い身体のラインが分かるワンピース。

太ももから足首にかけ、大きくスリットが入り、艶めかしく張りのある太ももが隙間から除く。

ガードーベルトに黒い二ー八イの光沢で艶が増して、男性の目を誘っている。

胸元まである黒髪を手で後ろに払うと、右手を上に向けた。

一言、呪文らしきものを呟くと彼女を中心に円形の陣が広がる。

そして、左手で男たちを招いた。

「早く、いらっしやい。一気に町まで転移するわよ。」

それを聞いたエリオットが魔物の死体を軽い足取りで飛び越えた。

「待ってくれよ。シャロンの姐さん。まったく姐さんは、せっかちなんだからよーっと。」

その後には、ふんつと鼻をならして荒々しい足どりで司祭のライトが陣に入る。

そしてエイゲルが陣に入ると、シャロンはパチンつと上げていた右手の指をならした。

足元に広がる陣が青白く発光する。

発光した陣が一際明るく輝く瞬間、何かがドテツと落ちる音と、あ
らっ？と言うシャロンの声がした。

その後、その場には何者も残っていないかった。

2、付いてきた男

町にとつた宿の一室に転移した勇者ご一行。

転移が完了したと同時に一斉に武器を構える。

エイゲルは大剣を。

エリオットは両手に一本ずつ片手剣を。

ライトは杖を。

シャロンは右手を。

未だ1人だけ尻餅をつく男に向かって。

男は肩につかないくらいの黒い髪に白い肌。

線が細く、村人が着る一般的な服装をしていて武器を持つてる様子

はない。

そして4人が武器を構えた姿をみて、口を開けて固まっていた。

最初に口を開いたのは、シャロン。

右手を男に向けたまま、左手を頬に添え首をかしげる。

「あなた、誰かしら？私の転移陣に落ちたみたいだけど。」

問われた男は未だ固まっていたが、痺れを切らしたライトが低い声で「おいっ」と男を促すと一気に覚醒し慌ただしく動きだした。

「待つて、待つて。殺さないで下さい。お願いします。悪気はなかったんです。」

姿勢を正し、土下座をする男。

シャロンが右手をおろし、男に近づいた。

しゃがんで男の顎を掴むと視線を合わせる。

「それで？どうやって私の陣の中に入ったのかしら？凄く、あなたに興味あるんだけど？」

顎を捕まれた男は、ほんのり顔を赤らめた。

「じ、じつは、俺。いや、私は森の中で迷ってしまいました。道を探してる最中に魔物に襲われて木のうえに避難をしていたのです。そうしたら、貴方がたが来られて魔物を倒して下さって。」

剣を構えたままエリオットが男を茶化す。

「おいおい、お兄さん。あんたウルフにも勝てないの？そんなんで、よく森になんて入ったねえ」

「と、とんでもない。あんな多くの魔物に勝てるわけないです。怖くて怖くて、腰が抜けそうだったんですから。本当に木登りやっ

いてよかったです。実は、子供の頃に」

ダンっと、イライラした様子のライトが足を振り下ろした。

それを見た男は、ひいっと悲鳴を上げると頭を床に擦りつける。

「すみません。すみません。ごめんなさい。すみません。」

シャロンは、軽く息を吐くと咎めるようにライトに視線をやった。

ライトは、ふんつと鼻をならすと外方をむく。

エリオットは、ヘラヘラ笑いながら男に続きを促した。

「お兄さん、この司祭様はいつも不機嫌だから気にすんなつ。で？
木登り上手なお兄さんは、その後どしたのさ？」

「はい。すみません。木のうえから眺めていると、どうやら町に転
移するという声が聞こえてきて。置いてかれては堪らないと思い、

えいやつと木から飛び降りたわけです。お陰様で尻が痛いやら、手首は痛いやらで」

男の話を黙って聞いていたエイゲルが剣を下ろすと、男にゆっくりと近づいた。

エリオット、ライトもその様子を見て武器を下ろす。

近づいたエイゲルは右手を男に差し出すと笑顔で握手を求めた。

「それは、災難でしたね。私は剣の勇者エイゲルです。ひとまず、貴方を保護いたしましょう。」

「しかし貴方の話が嘘の場合」

そこで勇者の顔から笑みが消える。

「喜ぶ。聖剣の錆びにしてやるよ。」

え？と男が聞き返すも、元の笑顔に戻った勇者は男の手を握るだけ。

つられて男も、弱々しく笑みを浮かべるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7108y/>

勇者御一行の拾いもの

2011年11月21日11時40分発行